

長の主導で活動がはじまった。

さらに、内発的地域振興と行政との関係という観点からこうした活動のタイプ分けを試みると、東北では町による活動の組織化が進んでおり、イベント（祭り）中心であるが、西では住民の側から、特定個人がリーダーシップを取るかたちで活動が進められる傾向があるということである。ただし、西では、活動の持続性という点に問題がある。大分県大山町では、はじめは住民の側から内発的に活動がはじまつたが、行政による組織化が進み、いまでは、強力な運動体をつくっているということである。

また、行政的活性化と内発的活性化の問題にかんしては、松本会員から、基本理念として行政はどの方向をめざしているのかという質問があつた。これにたいする答えは、いまは行政の側から働きかけているが、行政のめざすところは内発的活性化ではないかということであった。しかし、現実には、補助金によりかかった地域活性化が多く、そのなかで残っていくのは住民主体の活動ではないかということであった。

次に、渡辺会員から、限界集落ではどのように村づくりにとりくむべきかという質問があつた。これに対して、越井会員は、廃村になりそうな村については活性化より、どう救うかという問題であり、別の課題として非常に重要な問題であると述べた。また、渡辺会員は、オフ・トーカー通信を利用した香川県での村づくり・町づくりの例を紹介し、情報化と地域形成との関連についての研究の必要性を指摘した。

松本会員からは、地域政策という観点にたつた越井会員の報告を、これまで村や家を中心にしてきたわれわれ農村研究者が、これ

までの研究とどうかかわらせて受けとめるかが大きな問題であるといふ意見が出された。

最後に、司会をつとめた秋津会員から、報告のテーマである「地域文化」「地方文化」という言葉について、ある程度の共通認識をつくっていく必要性があるという意見が出された。

#### ※木村報告について

木村報告についての討論は、宮持と親族の関係、祭りと村の組織・運営、祭りと地域活性化の三点を中心におこなわれた。三点目の祭りと地域活性化の問題は、第一報告との関連で提起された論点である。

宮持と親族との関係については、まず玉里会員から質問があった。親族が少ない家は宮持にならないのかという質問である。これにたいして木村会員は、これまで九〇%以上が村内婚なので、親族が少ない家はまずないだろうということであった。次に、光吉会員から、宮持の親族というのは、夫方と妻方の両方なのかという質問があつた。これにたいしては、両方であり、そうでなければ祭りのさいに手が足りないということであった。

秋津会員からは、島を出でいった人と祭りとのかかわりについての質問が出された。これに対し、木村会員は、島を出でいた人も、それを迎える人も祭りを大変楽しみにしているが、祭りについて、島を出でいった人の意見が直接反映されることはない答えた。また、宮持の親族として祭りに参加している若者のなかには、島の外から帰ってきた人も多く含まれているということである。

祭りと村の組織・運営との関係については、村長会員から、漁協

とお寺と神社のあいだにはかなり強い関係があるのでないか、という質問があった。これにたいしては、漁協が村を管理しているという面はたしかにあり、神社の祭りには漁協がかなりの費用を負担しているということであった。また、行政上の村との関係については、かつては村長と漁業組合長は同一人物であり、現在は町内会長と漁業組合長は別の人間が勤めているが漁業組合長の方が格式は上で、村の運営においても漁業組合長が実権をもっているということであった。これに関連して、越井氏から、氏子惣代と祭りとの関係についての質問が出されたが、日常的な祭礼や管理は氏子がおこなっているが、祭りには関係していないということであった。

祭りと地域活性化の問題については、光吉会員から、祭りの宗教性はどの程度保たれているのかという質問があった。これにたいして木村会員は、観光化やイベント化への志向性は一切みられず、祭りはあくまで神事としてとりおこなわれており、本来の宗教性を保っていると答えた。ただし、報道関係者や観光客はかなり多いということであった。松本会員からは、商工会議所が祭りに観光化のためのアドバイスをおこなう例がみられるが、神島の場合には、地理的に、商工会議所が介入しにくい条件にあるということが観光化が進められようとしている一つの要因なのではないかという意見が述べられた。

第一報告、第二報告とも、それぞれ重要な論点が出されたが、時間の都合で討論に十分な時間を取ることができなかつた。さらに、第一報告と第二報告とをからめての総合的討論の時間が取れなかつたことが残念であった。